

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学 校 名	愛知県あま市立正則小学校	氏 名	杉村 定則
-------	--------------	-----	-------

1. 印象に残る写真2点

● 「この犬肉が私の口に！」



この写真は少数民族の村「モン族」の写真です。ちょうど犬料理が作られていて、その肉をもらってしまいました。もらった物は食べなければ失礼に当たるモン族の男性陣の輪に入り、すごく恐怖を感じました。

● 「交差する新旧」



日本から中古車として運ばれて今も活躍する佐川急便のトラックと、その横をリヤカーを引いて歩くおばさん、そして富裕層に増えてきた高級乗用車。発展は進んでいますが、古来からのものも混在していました。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

ラオスという国と人々の良いところを一つでも多く見つけ、また、日本という国を一人でも多くの人に伝えたいという気持ちで研修に参加しました。

ラオス人は自分の想像をはるかに超える温厚な人たちでした。そして、何よりも家族を大切にする人たちでした。自分自身ラオスという国に対して貧困というイメージがあり、暗い雰囲気なのかなと思っていましたが、子どもたちは誰もが元気いっぱい、アンケートでは誰もが家族が一番大切だと答えてくれました。物質的には日本の方が裕福だけど、目に見えない家族の絆や心の部分では、ラオスの方に学ぶ点がたくさん見つかりました。病院を訪問したとき、入院している1人に10人の家族が看ている姿は日本では見ることはありません。

ん。ラオスに行かなければ分からなかったことがたくさん見つかったので、しっかり子どもたちに伝えていきたいです。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスの子どもたちは本当に明るく笑顔が絶えない子どもたちでした。日本よりも教育環境が整っているとはいえませんが、それでも子どもたちはすごく輝いていました。日本では、勉強を頑張りたいと思えば誰にでもそのチャンスがあります。しかし、ラオスでは平等にチャンスはありません。それでも夢をもち、それに向かっていこうとする姿が見られました。

あと、ラオスの子どもたちは家族を大切にします。一番大切な物を尋ねると誰もが「家族」と答えてくれましたが、日本の子どもたちと比べて家族と過ごす時間の長さに気づきました。学校では教えてくれないしつげは家族が教え、病院に入院すると何人もの家族と一緒に病院で看病をしていました。この家族の絆は日本よりもかたく、温厚なラオス人の基本になっているのだと感じました。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ラオスで活躍する日本人の多さに驚きました。話を聞かせていただくと、誰もが赴任した当時はラオスと日本との考え方の違いに戸惑い、挫折しながらも自分の仕事を見つけてきたということです。このとき、日本でやってきたことを押しつけるのではなく、ラオスで行われていたことやその文化を大切にしながら、地域に溶け込んでいくのがすばらしいと思いました。

次に、日本製品の多さに驚きました。町中至る所にトヨタの車とホンダのバイクが走っていました。舗装されていない道ではトヨタの四輪駆動車は必需品であり、ホンダのバイクは家族の生活を支える重要な乗り物になっていました。日本語の書かれた中古の大型トラックも活躍し、地域の特性を考えながら、その中に日本の高い技術が浸透している姿を見て、日本人としてうれしくなりました。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

日本では障害者の支援が充実し、障害をもちながらも働ける環境があります。しかし、ラオスでは目立った活動はできずに家に引きこもってしまうことが多かったそうです。そこで、車いすバスケットの活動を通して、同じ障害を抱えた人が集まって友達になったり、バスケットの苦しい練習を積み重ねたりすることで、前向きな気持ちを育てていこうとする実践を前島さんが行っていました。バスケットをやっている皆さんの笑顔と温かい雰囲気がこの活動の成果だと感じました。

知的障害者を支援する活動では、クッキーを作る技術や美容の技術を習得させることによって、社会でも活躍できるようにしていく活動も見させていただきました。できたクッキーを大手企業に売り込み、企業と共に活動の範囲を広げていくことによって、働く人たちがより自信を深めて、社会で活躍できるように支援しているところがすばらしいと思いました。

2人に共通しているところは、障害者の自立に貢献したいという強い気持ちで活動に臨んでいることです。まだまだラオスでは浸透していない分野であるため困難が多いですが、それを楽しみながら解決してともに乗

り越えていこうとする姿がとても印象的でした。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

良いところは、日本人の活動によって現地の人が夢をもつことができることです。バレーボールをする子どもは「全国大会に出場したい」、障害者の方は「自立してお店を出したい」と話してくれました。JICAで活動する日本人も夢をもって活動に関わり、現地で生きる人たちの夢の手助けをしている活動をととてもすばらしい活動だと感じました。また、活動に関わった事業が、JICAの職員として現地で活動した後にも、その地に根付いて続いていくことに国際協力のすばらしさを感じました。例えば、バスを贈るだけではなく、バスの修理や点検も行える技術を伝えることによって、バスが現地で活躍し続けることができるということを聞いて、これが本当の国際協力なのだと感じました。

JICAの活動に参加していたラオス人は、わりと裕福な家庭が多く、まだまだ活動に参加することすらできない人もラオスにはたくさんいる感じがしました。そういった方々にも目を向け、より多くのラオスの方がJICAの恩恵を受けられるといいと思いました。あと、シニア海外ボランティアも青年海外協力隊のように、より活動に参加しやすい制度が早くできると、私も体力をつけて、この活動に参加したいと思いました。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・荷物にはなってしまいますが、アメはたくさんあると良かったです。現地の方に渡したり、自分たちが疲れたときに食べたり、大活躍でした。
- ・小学生と触れ合う時には、日本の広告は人気でした。内容を見て盛り上がり、広告を折り紙として使ったりできたのでぜひお勧めです。あとは絶対名刺を持って行ってください。写真を入れて手作りでも大丈夫です。何か聞きたいことがあったとき連絡をして聞くことができました（相手方の名刺も渡したときにいただけました）。
- ・道路の状態が悪く、車が進めなかったときが2回ありました。いつ何時トラブルがあるか分からないので、トイレは行けるときに行き、簡単なお菓子をかばんに入れておくと助かります。
- ・途中、バッタを食べる機会がありました。体調にもよりますが、日本では経験できないことはチャレンジしてみると思い出になります。そのときの映像は動画で残しておくと、授業等で活用できます。
- ・出発前にお金はいくら持っていくか困りましたが、1000\$あればお土産も十分買うことができ、生活も困りませんでした（訪問国によって異なるかもしれません）。

6. その他全般を通じての感想・意見など

ラオスで働く日本人の皆さんがすごく輝いていたのがすごく印象的でした。赴任した当時は困難が多く、誰もが壁にぶち当たりますが、限られた任期の中で自分の役割を見つけ現地に自分の足跡を残していくところがすばらしいと思いました。ラオス人はみんな温かく、笑顔の絶えない温厚な方ばかりでしたが、格差も広がっているようです。JICAの職員の方が「日本の子どもたちには誰にでも平等にチャンスがあるが、ラオスの子どもたちは貧しい家庭に生まれるとそこから抜け出すチャンスはない」と教えてくださいました。通訳のラオス人に「ラオスはすてきな国ですね」と話すと「元氣なうちはいいですが、いざ家族が病気になったとき、何も

してあげられないんです。日本はいいですよ」という言葉が返ってきました。ラオスのすてきな面を見ることができた反面、観光だけでは知ることができない大切なことが分かるすばらしい研修でした。

ラオスでの経験を日本の子どもたちにどう伝えていくのが自分たちのこれからの活動ですが、この研修でしか体験できなかったことを、子どもたちに伝えていき、少しでも多くの子どもたちが世界に目を向けることができるようにしていきたいです。

以上